様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３１ 年　 ４ 月 ２６ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６６８６

研究課題名（和文）Ｉ・マードックの道徳哲学から見た現代メタ倫理学の批判的再検討

研究課題名（英文）Critical reexamination of modern meta-ethics from I.Murdoch's moral philosophy

研究代表者
佐藤　岳詩（Sato, Takeshi）

熊本大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：６０７３４０１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリスの哲学者I.マードックの道徳哲学から着想を得て、現代において主流となっているメタ倫理学理論の批判的再検討を行うものであった。規範的であるとはどのようなことか、という問題の検討に注力する現代メタ倫理学の在り方に対し、マードックやC.ダイアモンドらの道徳理論に基づき、道徳的であるとはどのようなことか、という観点から検討を加えることで、もう一度メタ倫理学の可能性を拡張し、様々な実践的問題をメタ倫理学の観点から扱う方途を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究が明らかにしたことは、従来のメタ倫理学が特に合理的な道徳判断とは何かという問いをめぐって営まれており、それゆえに倫理や道徳が現れる場面を極めて限定的にしか捉えることができなくなっているということである。それは非認知主義や実在論と言った主流のメタ倫理学理論に否定的なE.アンスコム、徳倫理学者らの議論をもってしても同様であった。それに対し、本研究ではI.マードックらの考え方を援用することで、倫理のより多様な捉え方を提示した。これによって、従来の倫理学が捉えきれなかった倫理の諸相を取りあげ、様々な社会問題などを倫理学の枠内でより多角的に考える手掛かりが手に入ったと言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study was based on the moral philosophy of the English philosopher I. Murdoch, and made a critical re-examination of the contemporary mainstream meta-ethics theory. The movement of contemporary meta-ethics which has focused on what is to be normative and what is normativity is important but narrow. This study examined it, based on the idea of Murdoch and her follower, from the view point of what is to be moral and what is morality, and tried to show the possibilities of the richer meta-ethics and ways to handle various practical problems from the metaethical point of view.

研究分野：倫理学

キーワード：メタ倫理学　I.マードック　規範倫理学　規範性　道徳性

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の背景には、現代メタ倫理学が陥った閉塞的な状況がある。G・E・ムーアが『倫理学原理』（1903）の中で「善いものとは何か」と「善いとはどういう意味か」を区別したことに端を発したメタ倫理学は、その後の歴史を通じ、初期の言語行為論や意味論に加えて、存在論や心理学を取り込み、大いに発展を遂げた。とはいえ、21 世紀に至っても、その中心問題はいまだ、道徳判断とは何か、道徳判断の合理性／反合理性（客観性／主観性、普遍性／相対性）にとどまっており、決定的な進歩が得られたとは言いがたい。もちろん、この停滞を円熟と解することもできるが、本研究は、ここには以下のような問題があると捉えた。

第一に、20 世紀後半を通じての合理主義と反合理主義の論争は、その分析対象を「善」「道徳判断」「理由」と変化させ、あるいは心理学や存在論、認識論まで戦場を拡大させつつも、結局は互いに決定的な批判を構成しえなかった。その結果、現代メタ倫理学もまたその客観性／主観性を巡る狭いものに留まったものとなってしまった。

第二に、個々の理論が内向きとなったことで、お互いの関係を論じることが困難となってしまった。たとえば、一方でＤ・パーフィットのような意味論を扱う論者は存在論に関して静寂主義をとり、コーネルリアリズムを始め存在論を重視する論者はハイブリッド表出主義に代表される言語行為論的側面に目を向けない。結果、領域の全体を見通して一貫した議論を与えることができなくなったことで、メタ倫理学は個々の論点ごとの場当たり的なものという様相を呈している。

第三に、メタ倫理学が現実との接点を失っていることは早くから批判の対象となってきた。そのような逆風の中で、20 世紀のＲ・Ｍ・ヘアやＪ・ロールズが現実の諸問題に対する危機感をもってメタ倫理学と応用倫理学の両方に従事したのに対し、現代の細分化したメタ倫理学はあくまで自説内部での道徳判断の分析と整合性の確認を主としており、現実社会での応用が視野に入れられていないように見える。

本研究はこうしたメタ倫理学をめぐる状況を問題視し、従来のメタ倫理学理論の枠組みとは異なる新しい枠組みを提示する必要があるという認識にも基づいて行われた。

２．研究の目的

本研究課題の申請時における当初の研究目的は、現代において主流になっているメタ倫理学理論について、かつてＩ・マードックらが提起した視点から批判的に再検討し、それを通じて以下の二点を達成することであった。

a) 現代メタ倫理学を「選択すること」の観点から整理し直し、「視ること（vision）」の観点を加えた新たな見取り図を提示すことで、合理主義と反合理主義の間の議論の硬直から来るメタ倫理学全体の停滞とそれにともなう閉鎖的な細分化がもたらす諸問題を解消する。

b) 上で得られたメタ倫理学理解を規範倫理学、応用倫理学へと接続し、メタ倫理学から応用倫理学がひとつなぎとなった、より包括的で実践的な倫理学の体系を構築する。

３．研究の方法

本研究課題の研究方法について、その具体的内容を簡潔に記入すること。
本研究課題を以下の三つのサブ課題から構成されるものと捉え直し、それぞれについて、以下のようなアプローチを行った。

課題① マードックのメタ倫理学理論を精査し、そこから現代メタ倫理学を再構成する。

現代メタ倫理学の停滞を明らかにするためには、一度その外部からその構造を改めて眺めてみる必要がある。そのために、まず現代メタ倫理学とはまったく別の視点からメタ倫理学を捉えたマードックの思想に足場を見いだす作業を行った。彼女はヘアを批判した論文において当今のメタ倫理学が「選択」「評価」「判断」を無批判に偏重したものであると批判し、それに対置されるものとして「視ること」を中心としたメタ倫理学を主張しており、本研究でも彼女の理論を現代メタ倫理学に対するオルタナティブになりうるものとして検討を行った。

課題② ダイアモンドらの議論を検討し、これからのメタ倫理学の在り方を構想する。

ここでは、マードックの思想に影響を受けた論者の理論の検討を中心として、現在の停滞状況を超えてこれからのメタ倫理学がどのようなものでありえるかを検討した。その際、C・ダイアモンドや Ｊ・マクダウェルの議論を中心とすることで、合理主義と反合理主義、あるいは客観性と主観性という二項対立を超えて、理論全体を俯瞰しうるこれからのメタ倫理学の在り方を検討した。

課題③メタ倫理学理解を踏まえて、応用倫理学的研究を行う。

メタ倫理学を倫理学という実践の中に適切に位置づけるためにも、規範倫理学、応用倫理学との接続可能性を明らかにしておかねばならないという発想に立ち、様々な応用倫理学的諸問

を検討することで、実践の問題についても一定の提言を行う。同時にそこからのフィードバックを得ることで、メタ倫理学理論自体の洗練も試みた。

４．研究成果

本研究は、イギリスの哲学者マードックの道徳哲学から着想を得て、現代において主流となっているメタ倫理学理論の批判的再検討を行うものであった。合理性を軸として道徳判断の意義を検討することを中心に置いた現代メタ倫理学の在り方に対し、マードックや C・ダイアモンドらの道徳理論に基づき、道徳的であるとはどのようなことか、という観点から検討を加えることで、もう一度メタ倫理学の可能性を拡張し、様々な実践的問題をメタ倫理学の観点から扱う方途を示した。

具体的には、まず、R.M.ヘアと P.フットの論争から、現代メタ倫理学が道徳性を狭く、主に道徳判断とは何かという観点において論じてきたことを明らかにした。そして、マードックや P・ウィンチ、ダイアモンドらの倫理学理論を検討することで、それらとはまったく別なる道徳性の捉え方の道筋があることを示した。それによれば、ヘアらに代表される現代メタ倫理学は、もっぱら「選択」の問題として道徳を捉え、それゆえに「道徳判断」の本性を明らかにすることを倫理学の主務と理解した。他方で、マードックらは「視え方」の問題として道徳を理解する。彼女の主張を詳細に検討することで、必ずしも外側から確認できるような選択が行われなくとも、各人の道徳性は日常的に発揮されているのであり、選択時の道徳判断およびその合理性のみに注目する理論では、そうした道徳性がもつ豊かな広がりを捉えることができない、ということが明らかになった。あるいはウィンチの立場から、ある道徳判断について、それが下される以前と以後では、適用されるべき倫理学上の見方が異なってくることが示された。本研究では最終的に、マードックらの立場に一定の説得力を認めると同時に、両者を二者択一のものとして捉えず、いかにしてヘアらの立場とマードックらの立場が両立しうるかについて、一定の示唆を与えることを試みた。

これらと並行する形で、応用倫理学的研究として、D・ベネターの反出生主義、および動物倫理における肉食の倫理的正当化可能性についての研究を行った。ベネターの理論は、著書『生まれて来なかった方が良かった』の標題に明らかなように、人は生まれてこない方が良い(good)のであり、私たちには子を産まない道徳的義務（moral duty）があるというものである。彼の立場は、「良い」「道徳的義務」についての、特定のメタ倫理学的見解に支えられたものであるため、このメタ倫理学的前提の妥当性を検討することで、反出生主義には必ずしも十分な理論的基礎があるとは言えないということを示した。また肉食の倫理的正当化可能性を巡る議論では、S・ドナルドソンと W・キムリッカの動物の権利論、C・コースガードのカント主義に基づく動物倫理理論を取りあげ、その説得力について論じた。

以上、まとめると、本研究が明らかにしたことは、従来のメタ倫理学が特に合理的な道徳判断とは何かという問いをめぐって営まれており、それゆえに倫理や道徳が現れる場面を極めて限定的にしか捉えることができなくなっているということである。それは非認知主義や実在論と言った主流のメタ倫理学理論に否定的な E・アンスコム、徳倫理学者らの議論をもってしても同様であった。それに対し、本研究ではマードックらの考え方を援用することで、倫理のより多様な捉え方を提示した。これによって、従来の倫理学が捉えきれなかった倫理の諸相を取りあげ、様々な社会問題などを倫理学の枠内でより多角的に考える手掛かりが手に入ったと言えるだろう。また、現代ではあまり顧みられることのないマードックやウィンチの研究の意義の再評価をなしえたことは、これまであまり強調されてこなかったものの、実際には彼女らの影響を強く受けている B・ウィリアムズやマクダウェルといった論者の理論の捉え直しにもつながってくるだろう。今後は、そういった論者についての通説の見直しを図るとともに、本研究で得られた道徳性理解を、現代メタ倫理学において盛んに研究されている規範性理解と接続すること、およびそれらを功利主義や徳倫理学といった規範倫理学上の諸理論と接続することで、より包括的で体系的な倫理、道徳の理解を得ることが課題となってくるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. 佐藤岳詩　「C.ダイアモンドの分析的倫理学批判――分析対象としての倫理をめぐって」『現代思想』，第 45 巻第 21 号，青土社，pp.235-249，2017 年 11 月（査読無し）
2. 佐藤岳詩「二つの倫理学 ―― 選ぶことと視えること」『Humanitas』第 8 号，玉川大学学術研究所人文科学研究センター年報，pp.93-105　2017 年 3 月（査読有り）

〔学会発表〕（計 7 件）

1. 佐藤岳詩「P.ウィンチの普遍化可能性批判、再考」Meta and Normative Ethics Research 5th Meeting，2019 年 3 月 5 日
2. 佐藤岳詩「動物倫理と肉食」，第 23 回マルチスピーシーズ人類学研究会「食と肉の種的転回」, 2018 年 12 月 8 日

3. 佐藤岳詩「道徳の領域を見定める - R.M.ヘアと P.フットの論争を手掛かりに」, Morality mod Science セミナー特別編「モラルハッカソン 2018」, 2018 年 11 月 24 日
4. Takeshi Sato“ Locating the Spheres of Morality ” Center for Ethics Research Seminar, 2018 年 10 月 25 日
5. Takeshi Sato““ Good ” on Benatar ’s Anti-natalism ” Closed Seminar on “ Meaning in life ” and Analytic Existentialism, 2018 年 8 月 19 日
6. 佐藤岳詩「反出生主義のメタ倫理学的検討」, 学習院大学文学会・学習院大学文学部哲学科共催シンポジウム「D・ベネター 『生まれて来なかった方が良かった』をめぐって」2018 年 4 月 21 日
7. 佐藤岳詩「二つの倫理学 ― 選ぶことと視ること」, 玉川大学公開講演会「倫理の基礎をめぐって」, 2016 年 6 月 4 日

〔図書〕（計 1 件）
1. 佐藤岳詩『メタ倫理学入門：道徳のそもそもを考える』勁草書房, 338 頁, 2017 年 8 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。